



こうさんきゅうせいふくびくうえん 好酸球性副鼻腔炎の 治療法は？

55歳、男性。昨年秋、喘息と診断されました。最近、鼻づまりがひどく、においを感じにくくなりました。耳鼻科で「好酸球性副鼻腔炎」と診断され、内視鏡による手術をすすめられています。再発も少なくないと聞きました。治療法と再発予防について教えてください。（神奈川県 F）



● 回答者 ●
笠井耳鼻咽喉科
クリニック
自由が丘診療室
笠井 創

A 軽症の場合はステロイド薬と抗ロイコトリエン薬の内服治療を。手術は再発が少なくないため術後の管理が大切

細菌感染をくり返すことでおこる慢性副鼻腔炎は、マクロライド系抗生物質の長期内服療法や内視鏡下副鼻腔手術などで完治が可能になってきました。アレルギーが原因でおこるアレルギー性副鼻腔炎も抗ヒスタミン薬や一般的な副鼻腔炎の治療で改善します。しかし、こうした一般的な治療法では治りにくい好酸球性副鼻腔炎というものがあることがわかってきました。鼻の粘膜や血液中に白血球の一種である好酸球がふえることから病名がつけられました。

好酸球性副鼻腔炎の特徴としては、①成人に多い、②両側の鼻の中に鼻茸が充満している、③一般的な副鼻腔炎の症状である鼻づまり、鼻漏、頭痛のほかにお臭覚障害が多い、などがあげられます。鼻水がニカワのように粘り気があるのも特徴で、鼻をかんでもなかなか出せず、耳鼻咽喉科で鼻の治療をしても簡単にはすつきりさせることができません。気管支喘息を合併していることが多く、アスピリンで喘息が誘発されるアスピリン喘息を発症する人もいます。同じような病気の変化が耳の中におけると好酸球性中耳炎と呼ばれ、聞こえが悪くなります。

治療にあたって、喘息がおきている人はまずその治療を優先します。好酸球性副鼻腔炎が比較的軽症の場合には、特効薬のステロイド薬とアレルギーを抑える抗ロイコトリエン薬の内服治療を行います。ステロイドは内服で使う場合、2週間くらいなら問題はないのですが、それ以上の長期間では副作用に注意が必要となります。内服に比べると効果は落ちますが、ステロイドの点鼻療法は副作用が少なく、ある程度長期間使うことができます。このような保存的治療を継続しても鼻づまりがひどく、嗅覚の改善がないという重症の人では手術の治療を考慮することになります。しかし、好酸球性副鼻腔炎は手術を行っても再発して再手術が必要になることも多く、完治は期待できないのが現状です。手術後にも鼻の洗浄治療を行い、ステロイドの点鼻や内服と抗ロイコトリエン薬の内服を継続してできるだけ病状が悪化しないように管理していく必要があります。